

異校種間の接続教育及び一貫教育のあり方について

(令和2年度経過報告)

附属学校改革専門委員会；(代表) 田代高章*，渡邊奈穂子**，板垣健***，阿部智央***，加藤佳昭****

*教育学部，**教育学部附属幼稚園，***教育学部附属小学校，****教育学部附属中学校

(令和3年3月4日受理)

1. 本研究の位置づけ

本研究は、教育学部の附属学校運営会議の下部組織である附属学校改革専門委員会の所掌する、第三期中期目標中期計画における附属学校改革の三つの課題についての一つ（異校種間接続教育）に関する研究である。

附属学校改革専門委員会においては、以下の中期目標中期計画のもとに研究を推進している。

具体的には、岩手大学第三期中期目標の【16】

「地域創生の観点に立ち、地域の教育諸課題を解決することのできる、地域の初等・中等教育機関教員を養成するための実習校としての機能を強化する」と、その下での中期計画の【32】「地域創生を担う初等中等教育機関の教員養成実習校として機能するため、教育学部及び教職大学院と連携・協力して実習カリキュラムを開発し導入する。これにあたっては、小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発や教職大学院における実習カリキュラムの確立等を行う。」、および、

【17】「地域のモデル校としての附属学校の機能を強化し、先導的・実験的取組を通じた教育・研究を進め、地域の教育課題に応える。」と、その下での中期計画【34】「地域のモデル校として、多様な子どもたちを受け入れ、幼稚園、小学校、中学校という異校種間の接続教育及び一貫教育のあり方や小学校の専科制について調査研究を行う。そのうえで、附属学校の機能を強化するため学級数、入学定員の適正化を図り、教員の適正配置を計画し、実施する。」を実現するための全学的な位置づけのもとでの研究である。

上記の中期目標・中期計画にしたがって、地域課題の解決にも貢献しうる地域のモデル校として

の役割と、地域創生のための附属学校園の機能強化を目指した取り組みを学部と附属校園と共同で進めている。具体的には、①小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発、②小学校の専科制のあり方について、③異校種間の接続教育及び一貫教育のあり方について、の三つの研究テーマに沿って、附属学校改革専門委員会を中心に、具体的な計画の実施に取り組んできた。

本論は、三つのうちの、③異校種間の接続教育及び一貫教育のあり方について、第三期5年目の経過報告の位置づけを有している。

(文責：田代 高章)

2. 本研究の内容

本研究では、校種間接続のため、附属幼稚園と附属小学校、おとび、附属小学校と附属中学校において、それぞれ幼小連携、小中連携教育の取り組みを行ってきた。

(1) 幼小連携の今年度の取り組み状況

幼小連携に関しては、「スタートカリキュラム」の開発という視点を持ちながら、幼児の活動と附属小学校の「生活科」との接続を中心に研究を進めてきた。

令和2年度における具体的な取り組みは以下の通りである。

1) 幼小連携推進会議について

幼小連携推進会議①(2020.4.24)

小学校授業参観(延期)

【参加者】 小学校・・・1年生担任団

幼稚園・・・年長担任団・前年度年長担任団

【当日の経過】15:30～今年度の幼小交流

の方向性について

幼小接続のカリキュラムについて

進学した1年生の子供の引き継ぎ

幼小連携推進会議②(2020. 8. 4)

【参加者】 小学校・・・1年生担任団

幼稚園・・・年長担任団・教務

【当日の経過】 13:30～

スタートカリキュラムについて

接続を意識した互いの実践の内容について

今後の幼小交流活動について

幼小連携推進会議③(2020. 12. 23)

小学校授業参観

【参加者】 小学校・・・1年生担任団

幼稚園・・・年長担任団・教務

【当日の経過】 9:30～12:15

1年生授業参観(つばめ・・・国語、
はと・ひばり・・・道徳)

16:00～

授業を参観しての意見交流

今後の幼小交流について

小学校の生活科の公開授業について

2) 幼小交流活動

幼小交流活動の打ち合わせ(2020. 1.

15)

【参加者】 小学校・・・1年生担任団

幼稚園・・・年長担任団

【当日の経過】

16:30～

幼小交流活動について

LINE 電話による交流活動(2020. 1.

20)

○今後の予定

- ・2月に、幼小交流活動の実践。(それぞれ自分の1年間を振り返りながらカルタを作成。) → その成果の一部が附属小学校公開研「生活科」授業公開にて発表(2月12日)

今後の課題: 幼小連携カリキュラムについて

・「アプローチカリキュラム作成」・・・昨年度3月の連携推進会議で確認し、今年度の実践も挿入して作成していく。

・「スタートカリキュラム作成」・・・今年度8月に連携推進会議で確認し、加筆・修正していく。

※それぞれが連携を意識して作成したカリキュラムを検討し、継続して実施したものを積み重ねていき、今後は、互いをつないでいく幼小連携カリキュラムを作成していく予定。

(文責: 渡邊奈穂子)

(2) 小中連携の今年度の取り組み状況

小中連携教育に関しては、特に、「総合的な学習の時間」に特化して、小中連携教育の在り方を模索してきた。

「総合的な学習の時間」について、附属小学校では、「わかたけタイム」、附属中学校では、「ヒューマン・セミナー」として、これまで各校で独立して教育活動を展開してきたという経緯があった。

本研究では、両者をつなぐことを念頭に、小中の教職員間の交流、児童生徒間での交流活動による連携に取り組んできた。

昨年度からは、特に、「総合的な学習の時間」を中核にしつつ、そこから分岐させて、「外国語教育」「プログラミング教育」を重点テーマとして、研究を進めつつある。

令和2年度における具体的な取り組みは以下の通りである。

1) 6月18日(木) 附属小校内研究会への参加
道徳 平澤傑, 浅倉祥

保健体育 平澤傑, 北法子

2) 8月24日(月) 小中連携に関わる打ち合わせ

【附属中学校】 平澤傑(研究主任), 山蔭理恵・大瀧航・芳門淳一(外国語教育), 加藤佳昭(プログラミング教育), 木村義輝・中村正成・藤村和弘

(総合的な学習の時間担当)

【附属小学校】菅原純也(研究主任),
大森有希子・白間勇輔・
檜木航平・遠藤勇太
(外国語教育),
上田佳穂・堀籠謙友・松舘慧(プ
ログラミング教育),
関戸裕・黄川田健・伊藤陽平(総
合的な学習の時間担当)

打ち合わせ内容

【外国語教育】「小中連携に関わる実践内容の検
討」

- ① 例年2月に行われている小中交流
で、グループごとに分かれ、中学生
は学校生活を小学生に英語でプレ
ゼン、小学生は中学校生活での夢を
英語で発表

→ 2月の小中連携のねらいが別
にあることも鑑みると、小中交
流とは別日に設定することも
考えられる。その場合、小学生
は、準備した内容を英語で発表
し、中学生は会の進行や質問・
感想を英語で即興で行うなど。

- ② 中学校英語教員が小学校へ出前授
業をしに行く等

【プログラミング教育】「小中連携に関わる実践
内容の検討」

「スクラッチ」の制作について、小学
5年生と中学1年生が共に課題に取り
組み、作成したプログラムを紹介する。
中学1年生から小学5年生にプログラ
ミングについてアドバイスする時間を
設けたり、相互評価したりするなどが考
えられる。

【総合的な学習の時間】

「各学校における実践交流及び目指す子ども
の姿の構築」

小学校卒業段階で既に習得済みの内容
や、実施済みの活動を、中学校段階でさ

らに深化・発展させる内容であるか(重
複とならず)を吟味する。義務教育9年
間を通した系統的なカリキュラム・マネ
ジメント(特に資質・能力)の系統性を
構築する。

『「地域学習」についての系統的なカリキュラム
開発』

小学校では、学習の場を地域に広げ、
探究の成果を学習発表会という形でプ
レゼンしている。中学校でも昨年度から、
生き方に関わる学習だけではなく、地域
に関わる学習との往還へと移行してい
る。地域学習についても小中の円滑な移
行に繋がるようカリキュラム開発を行
う。

→ 成果を研究紀要の「総合的な学習の
時間」の実践内容としてまとめる。
特にカリキュラム・マネジメントに
ついて触れる。

- 3) 12月8日(火)～11日(金)附属小学校
「卒業研究発表会」の参観

12月8日(火) 浅倉祥 小原翔太

12月9日(水) 林濤 中村正成

12月11日(金) 藤村和弘 木村義輝
平澤傑

- 4) 12月22日(火)小中連携に関わる外国語
出前授業

講師 大瀧航(附属中英語科)

- 5) 小中連携カリキュラム(総合、情報、外国語)
について検討中。

(文責:加藤 佳昭)

3. 成果と課題

(1) 幼小連携について

生活科を中心に据えながら、教職員間の交流、
幼児児童間の交流(授業と活動において相互交流)、
スタートカリキュラムを念頭に置いた連携カリ
キュラムの開発に着手したことが成果である。

校種間接続については三つのレベルが考えられ
る。第1に教員レベルの接続(情報共有・相互参

観・相互乗り入れ授業等)、第2に子どもレベルの接続(交流活動・交流学习等)、第3にカリキュラム(教育課程)レベルの接続である。

第1、第2のレベルは比較的実行しやすいといえるが、一番大きな課題が、第3のカリキュラムレベルの接続である。

幼小連携でも、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を念頭に、育成を目指す資質・能力を中心とする、活動単元での幼小連携カリキュラムの構築も求められる。

今年度も、附属幼稚園と附属小学校の生活科担当教員とで密接な連携を図りながら、幼小連携推進会議で検討が進められている。

研究計画の最終年度である令和3年度に向けて、カリキュラムレベルでの接続を、さらに推進し、一定の成果を提示することが求められる。

(2) 小中連携について

小中接続に関しては、過去4年間で、教員間の交流の充実を図りながら、児童生徒間レベル、カリキュラムレベルで徐々に進展してきている。

総合的な学習の時間を小中連携の中核に据え、両校の教員が、児童・生徒の活動の様子を実際に見ることを通じて、育成を目指す資質・能力のイメージが明確化されてきていることが成果といえる。

特に、小中一貫教育の視点を持ちつつ、昨年度でも指摘された課題である、「わかたけタイム」と「ヒューマン・セミナー」の指導計画の再検討が行われてきていることは大きな成果である。

附属中学校では、附属小学校で中心に取り組んできた「地域課題の解決」という要素を盛り込んだ試行的実践が始まっている。活動内容面もさることながら、育成を目指す資質・能力のレベルで小中接続を考えた方が、取り組みとしては実現しやすい。

今後は、子どもの成長発達の連続性を意識して、体系的に資質・能力をどのように育成していくかについて検討する必要がある。

さらに、「総合的な学習の時間」に加え、昨年度

から焦点化して取り組んでいる「外国語教育」、「プログラミング教育」の計3つの柱による小中一貫の教育活動の実施改善に加え、カリキュラム・マネジメントの視点から、各教科等固有の学習活動との関連、および各教科等の小中連携についても推進を図り、組織的・体系的な学習指導を実現していくことが課題である。

小中一貫教育の取り組みに関しては、附属学校に先んじて、盛岡市、大槌町、住田町など、先行的に取り組んでいる自治体や学校も存在する。来年度は、紫波町でも一部の地域で小中一貫教育が本格化する。

小学校専科制の課題とも連動しつつ、附属学校としても、本研究の最終年度である令和3年度には、公立学校に十分に参考になりうるカリキュラムレベルでの小中一貫のモデルを提示していくことが求められる。

(文責：田代 高章)